「児童生徒の地域活動を充実させるためのセミナー」報告

富山県立にいかわ養護学校

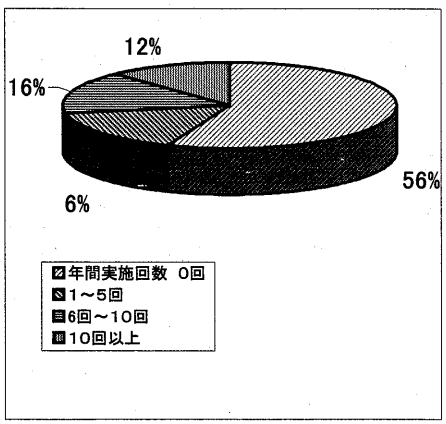
1　はじめに

平成１２年度に全知Ｐ連の指定を受けたことで始まった本校の「ボランティア養成講座」であるが、平成１３年度にも講座を実施し、併せて定期的に児童生徒の居住地区毎の地域活動を実施することとした。継続した活動として「ボランティア養成講座」が根付き始め、平成１４年度も同様の取り組みをと考えていたところ、全知Ｐ連からセミナー実施の依頼があった。

セミナー実施校として名を連ねたものの、ブロック内で拠点となり輪を広げていくという使命は重く、どうしたら良いのかわからないまま、ブロック各校の実情を知るために事前アンケートを実施した。

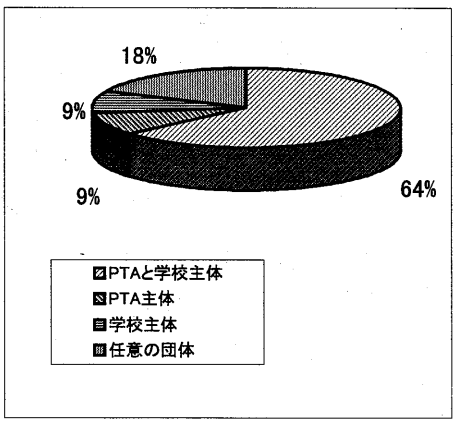
事前アンケート結果（地域活動についてのみ記載）

＜休業日の地域活動実施回数＞



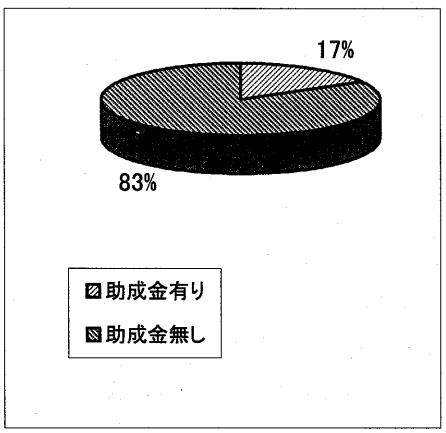
半数以上実施していない

＜地域活動の実施主体＞



ＰＴＡと学校が協力して実施

＜公的補助金＞



助成金無しがほとんど

その結果、北陸地区のどの養護学校でも学校週五日制や放課後対策としてPTAがなんらかの取り組みをしていることがよくわかった。

しかし、その実態が様々なことやそれぞれの地域性によりニーズが違うことが予想され、セミナーでの話し合いのテーマを絞ることは難しいと考えた。そこで、今回は初回でもあり、各校の活動報告や情報交換の時間を持ち、お互いの活動の参考にすることにした。

また、児童生徒の地域活動を充実させるためには、

学校の協力が絶対に必要と考え、保護者だけではなく、教職員にも参加を呼びかけることにした。

2　セミナーについて

セミナーの実施日や、会場、参加者、プログラム等は以下の通りである。

・日　時　　１１月２６日（火）１０：３０～１５：３０

・会　場　　富山県民共生センター

・参加者

	保護者	教員	合　計
福井県	９名	９名	１８名
石川県	１１名	１０名	２１名
富山県	４５名	１５名	６０名
合　計	６５名	３４名	９９名

(1)活動報告

①富山県　＜にいかわ養護学校　　辻井則子 PTA 会長・青木博美教諭＞

３年間の「ボランティア養成講座」の取り組み、児童生徒の居住地区における地域活動の様子について報告する。ボランティア養成講座と同時に開始した PTA による地域活動は、現在児童生徒の居住地区を４つに分け、ほぼ毎月１回実施している。保護者の意識の変化とともに内容が少しずつ充実している。「ボランティア養成講座」は学校が企画し、夏休みのＰＴＡ地域活動と重ねて実施している。ボランティアと楽しそうに遊ぶ子供たちの様子をビデオで、地域活動の様子をスライドで紹介。何もないところからスタートしたけれども、細々と続けていることで地域活動の必要性も浸透し、保護者同士のつながりも生まれてきている。今後も子供たちの豊かな生活を地域に求めながら活動を続けていきたい。

②石川県　＜金沢大学附属養護学校　旧職員浦田節子氏＞

ホリデイ・サービスは始めてから４年目、予算がついて３年目である。親しい親が集まって長い夏休み、せめて、子どもと何かしよう、ということで始まった。予算も何もない中で、お母さん方は毎回場所を探し内容を考え大変がんばった。

２年目、金沢市がホリデイ・サービスという名前で「手をつなぐ親の会」に依託して、小学校の空き教室を改装し、予算をつけてくれた。長い休み中、生活リズムを崩さないで、発達年齢や障害に配慮した有意義な生活の場を提供することを目的としている。 また同時に、保護者のリフレッシュという目的も含まれる。

内容は、食事・排泄等日常生活の自立支援、子どもに応じた遊びや課題学習の支援、公共施設の利用や買い物、生活の場を広げる活動の支援、集団活動の支援、文化的活動の支援などである。場所が狭いので登録者(約 100 名)の中から毎日 15 人を選んでいる。実施は、土・日を除く長期休業中で、時間は 10:00～15：00 まで。対象は小１から高３。

利用料は1日1000円で昼食は各自持参である。

スタッフは、7～8人。ボランティアは、ゲストボランティア、登録ボランティア、ふらっとボランティア、というように多様な形で、今年は100名ぐらいいる。悩みは、ボランティア・スタッフを集めるのが大変なこと。新しい人に即戦力になってもらうためにボランティア10か条や、親にはおむかえ10か条を作っている。来年は希望者が多いので2ヵ所で開催の予定である。

③福井県　＜福井南養護学校　冬井光二教諭＞

近年、福祉の地域化や学校5日制によって家庭で過ごす時間が増えたことで子供たちを居住地域で見ていこうという考えから、今年度より地区活動をスタートさせた。その活動主体は「ＰＴＡと学校」で、ＰＴＡ組織に3つの地域からなる地区委員会を作り、それぞれの地区委員会の委員や委員長が計画立案し、当日は中心となって活動をする。学校計画を作る会議に出席したり、計画書を配布したり、当日は手伝いをする。内容は、ゲーム、ボウリング、バーベキュー、パン作り、ソフトバレーボール、クリスマス会などで、会場は公共の施設やボウリング場を利用している。学校の施設も使用してよいことになっているが、地域の活動ということで今のところ使用していない。今年度はそれぞれの地区が学期に1回、全体で9回活動する予定になっている。公的補助はないので、ＰＴＡ一般会計に地区活動費を予算化し、それに参加費を加えて活動している。

スタートしたばかりで特に決まりごとはなく、3地区それぞれに工夫して取り組んでいる。しかし、現在次のような問題点が上がっているので今後は話し合いが必要である。

・卒業生がどのように地区委員会に加わっていくのか。
・年齢差や障害の程度に開きがある中で活動内容をどのように設定するか。
・現在、土曜日開催が多いので土曜日に仕事がある保護者は参加しにくい。

規模が大きくなると小回りがきかないので、少人数のグループによる活動も行い、将来的には少人数で回数を多くして、週末の学童保育のようにしていきたいと考えている。

(2) 情報交換

発表後の情報交換では、発表校に対してはもちろん、それ以外の学校に対しても事前アンケート結果の内容についてたくさんの質問が寄せられた。質問の多くは、次の二点についてであった。

◎実施主体、連携機関について

事前アンケート結果では、実施主体の大半が「PTAと学校」でしたが、それ以外の実施主体に参加者の関心が集まった。「NPO法人」「青年会議所」「地元企業」「ボランティア団体」「育成会施設」「町内会」等の企画・運営による活動について詳しい説明が求められ、具体的内容についての回答があった。

◎補助金、参加費等お金に関することについて

補助金（助成金）の出どころや具体的な金額、また、参加費の金額やその内訳、さらにボランティアに対するお礼や交通費をどうしているかについて、質問があった。

その他、各校の活動内容について詳しい説明があった。参加者からは保護者を中心にほとんど切れ間なく手が挙がり、時間を延長しての活発な情報交換の場となった。質問者からの問いかけはどれも具体的な点についてであり、地域活動に対する関心の高さが感じられた。

(3) 講　演

全知P連子育て支援事業実行委員長、東京都立中野養護学校PTA会長の永田直子氏が「地域で生きる」という演題で講演された。

子育て支援事業実行委員長という立場ではなく、一人の保護者として永田氏がこれまで歩んでこられた道、関わってこられた様々な活動についてお話していただいた。

（これまでの活動から）

現在高等部３年生のわが子が小さいころ、早期療育を受けたくても満員の状態であった。待っているだけではいけないと、親子で定期的に集まる場をもうけ「公園の会」を発足させた。その後、定期的継続的に使用できる場所を得て、「たまごの会」がスタートした。○○活動とか○○運動というのは、社会的に余裕のある人がやるものだと思っていたが直面したときに待っていてもしょうがなくやらざるを得なくなって始め、それが実っていくことがある。その後、転居先の地域で放課後活動「フォスター」を始めた。親子で参加できる場と同時に親が仕事を持っている子供たちも参加できる場の必要性を感じて作った。そこで多くのボランティアさんと出会った。

（ボランティアの主体性と自己実現）

「フォスター」の活動を全知Ｐ連の大会で発表したことから子育て支援の委員長になったが、ボランティア養成講座の養成という言葉に抵抗があった。しかし、ボランティアは、自ら応募し、自ら何かを求め、自己実現のために来ている人たちであり、そういう意味から考えると子供と対等であると考えてよい。先生や親は、どうしても子供と向き合ってしまうが、ボランティアさんは横に並んでいられる存在である。

子供がボランティアと過ごすとき、活動内容・充実も大切だが、一番に考えなければいけないのは「よい時間・空間を共有する」ということ。よい時間・空間を一緒に過ごせる人が地域の中に多くなることが大切である。

（親の役割）

親自身が子供たちの存在を「居てあたりまえ」という感覚で、地域の中に出ていけるかどうかが大事なのではないか。自らが、本当に開かれた親にならなくてはいけない。全員就学の時代に、子供の行き場が、「家庭と学校」になったように、五日制というのは、「家庭と学校と地域」というように地域の大切さが位置づく転換期である。地域に開かれた学校ということがよく言われるが、親が地域に開かれなくてはならない。何よりも抱えこまないで地域に出していくことが大事。

（今後）

これからは教育もそうであるが、地域でいろいろなされていくべきである。待っていても始まらない、できる人ができる所でできることをする。そのことが子供たちが生きていくことの充実に本当につながっているのか、子供の視点に立って考えていくことが望まれる。

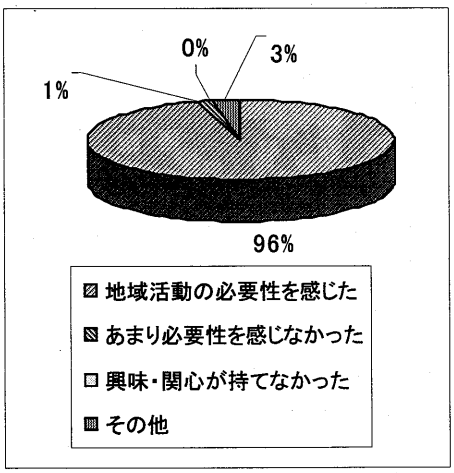
3　セミナーを終えて

セミナー開催にあたっては、どのくらいの人が集まるのだろうか、意見は出るのだろうかとか、不安の方が大きかった。参加を呼びかけた時点で、この事業が、十分理解されていないこともわかった。

しかし、実際の会場の雰囲気は、とても活気があり、地域活動に対する関心の高さが感じられた。参加者それぞれが、他校の話を聞きながら見せる驚きや納得の表情、同じ学校からの参加者同士でささやき合う声からも自分の学校での活動に対する意欲の高さがはっきりわかった。

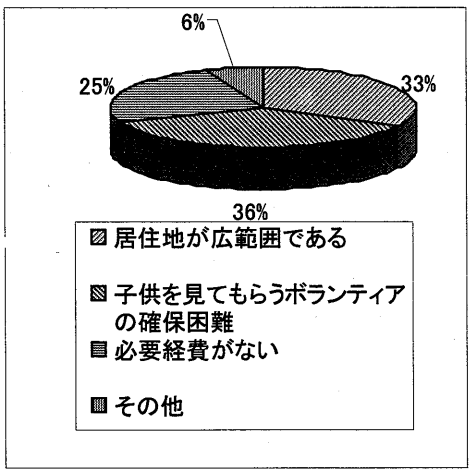
当日のアンケート結果

＜地域活動の必要性＞



参加した殆どの人が必要性を感じた

＜地域活動実施する際の問題点＞



広範囲な居住地とﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ確保の困難さがほぼ同数

当日の参加者のアンケート結果でもわかるように、地域活動の必要性を感じたという回答が100%近くを占めている。　だが、必要性を感じながらも現実には様々な問題点が挙げられている。事前アンケートにおいても、同様の点が、困っていることとして挙げられていた。

- 児童生徒が少ないうえに、居住地区が広く分散しているので、地区ごとの活動がなかなか行えない。
- 附属等の場合，地域でといっても受け皿がない。かといって常に学校主体の行事ばかりだと地域に溶け込む機会がなくなってしまう。
- ＰＴＡ役員、スタッフ、ボランティア、自分たちで取り組んでいこうとする意欲の不足。

・　土曜日や夏休みに活動を実施しているところがあるが、遠い。
・　それぞれの子供に合う内容と考えるとどうしていいかわからない。

しかしながら、前向きな意見として、「今後、どうしたらよいか考えるよい機会となった」「他校の活動についていろいろ聞けてよかった」「各地域独自の取り組みをという永田氏の言葉を力強く感じた」などの感想も寄せられ、心強く感じた。

今回の、初めてのセミナーでは、地域性の違い等があるものの、共通の課題がいくつか出たように思われる。どの学校もいろいろ試行錯誤の状態なのは同じで、悩みながらもがんばっている仲間がたくさんいることがわかり、「よし自分たちもがんばろう」という気持ちになれたのではないか。北陸地区知的障害養護学校PTA連合会がブロックとして集まっての研修会は、講演会以外では初めてであり、セミナーを実施したこと自体、非常に意義のあることだったと思う。今回のセミナーを契機に、各地区の地域活動が少しずつ活性化していくことと信じている。